

昭和天皇が戦争狂になった背景

戦前、皇室には予算として年額 450 万円が国家予算から計上されていたが、一説によれば天皇の総資産は少なく見積もっても約 16 億円であるという。

だが、宮内庁のこの数字は嘘で、本当の資産総額は、海外へ隠した資産を含めれば、信じ難いような天文学的金額であるともいわれる。

皇室予算だけではこのような金額を貯蓄することは不可能であるが、当時 皇室は、横浜正金（後の東京銀行）、興銀、三井、三菱ほか、満鉄、台湾銀行、東洋拓殖、王子製紙、台湾製糖、関東電気、日本郵船等 大銀行、大企業の大株主であり、その配当総計は莫大なものであった。

すなわち、これら企業・銀行の盛衰は、そのまま皇室に影響を及ぼすわけである。

こうなると戦争で財界が植民地から搾り取るほどに、皇室は豊かになるということになる。戦前の天皇家と国家、あるいは天皇家と資本家の関係がこれで言い尽くされているであろう。

天皇は昭和の世界大戦に深く関与した。

いかにユダヤ金融資本から仕掛けられた戦争であろうとも、大企業、大銀行はみんな戦争経済へと誘導したのであって、その大株主であった天皇が戦争を指導したのだから、責任なしとは言えない。

私は、先の戦争に関して、連合国に謝る理由はないと思うが、天皇に戦争の責任は重大だったと思う。

天皇家と日本郵船は、明治期から深い仲にあった。

日本郵船の大株主は、天皇と三菱財閥であった。

当時は海外渡航と言えば船舶しかなく、日本郵船は日本貿易の命綱である。

この日本郵船が大量の移民をアメリカに送り込んだ（数十万人といわれる）し、また大量の若い女性を海外に運んだのである（娼婦にするためである！）。

日本郵船だけでなく、天皇は大阪郵船の大株主でもあり、これを使って、日本は手に入れた外地へ、人間や物資を運ばせ、莫大な利益をあげさせた。

鬼塚英昭氏の『天皇のロザリオ』（成甲書房）によれば、福沢諭吉は、「賤業婦人（娼婦）の海外出稼ぎするを公然許可するべきこそ得策なれ」と主張している。

外貨稼ぎに日本の女性を使えと言ったのであるから、どこが「天は人の下に人をつくらず」だ！

つまり 諭吉は、娼婦の海外輸出は天皇と三菱に利益をもたらすから「得策」と平然と云ったのである。

慶應義塾とは日本資本主義と天皇を支える私学の重要な学校であった。

財界人を多く輩出したのは慶應義塾や官製の東京帝国大学であった。

そこを出た財界のトップたちは、2・26事件を影で操り、そこから一気に戦争経済へ主導し、政府要職にも就くなどして日本を大戦争とその果ての破局へと導くのである。

鬼塚英昭氏の『天皇のロザリオ』には、戦前の皇室が銀行支配も徹底していたことを書いている。

皇室は日本銀行の47%の株を所有していた。

だから紙片を発行し、公定歩合を調整するたびに、莫大な利益が皇室に流れた、とある。

日銀は発足当初から国際ユダヤ資本の日本支店であるから、これでいかに天皇家とユダヤ資本が深い関係かがわかるだろう。

さらに鬼塚氏は、天皇とアヘンの関係も暴露している。

同じ手口（米国に移民を送って儲けた話）を、皇室と三菱は考えた。

ペルシャ（イラン）からのアヘンの輸入であった。

皇室と三菱は、三井も仲間に入れることにした。

三井を入れなければ、内乱が起こる可能性があったからだ。

三井と三菱は、隔年でアヘンをペルシャから入れ、朝鮮に送り込んだ。

満州という国家は、このアヘンの金でできた。

天皇一族は、この利益を守るために、秘密組織を作った。

厚生省という組織に、天皇は木戸公一（後に内大臣）を入れ、アヘン政策を推進させた。

1938（昭和13年）年12月に、興亜院がつくられて、アヘン政策を統括した。

日本でもケシ栽培をし、朝鮮にほうり込んだ。

中国でも、熱河省でケシ栽培をした。

この利益も皇室の財産の形成に大きく貢献した。

多くの（ほとんどと言うべきか）軍人たちが、三菱と三井のアヘン利益の一部を貰って、遊興にあけくれた。

天皇も、財閥も、軍人も、アヘンという恥ずべき巨悪に手を染め、巨利を得ては、遊興に使うために、戦争を次々に仕掛けたのだった。

このゆえをもって、天皇はついに終生、中国と朝鮮には足を踏み入れることができなかつた。

ちなみに沖縄も、天皇は自らの助命と引き換えに、米軍の永久使用を提供したので、これまたついに沖縄を行幸することはできなかった。

皇室は蓄えた資産をモルガン商会を通して海外で運用していたが、金塊、プラチナ、銀塊などがスイス、バチカン、スウェーデンの銀行に預けられていた。

さらに取り巻きの重臣たちもそれに倣って同商会に接触し、そのおこぼれに預かっていた。

中立国スイスには敵対する国の銀行家同士が仲良く机を並べて仕事をしている奇妙な現象が見られるが、なかでも国際決済銀行、通称バーゼルクラブは、世界の超富豪が秘密口座

を持つ銀行で、治外法権的な存在であった。

内大臣・木戸幸一は、日米英戦争末期の昭和 19 年 1 月、日本の敗北がいよいよ確実になると、各大財閥の代表（銀行家）を集め、実に 660 億円（当時）という気の遠くなるような巨額の皇室財産を海外に逃がすよう指示した。

皇室財産は、中立国であるスイスの銀行に移され、そこできれいな通貨に“洗浄、されたが、その際 皇室財産は、敵対国にばれぬようナチスの資産という形で処理された。

スイスは、秘密裏にナチスに戦争協力したので、ナチスの名の方が安全だったわけである。昭和天皇は大東亜戦争中、宮中に大本営を置いて陸海軍の下僚参謀を指揮して作戦を実行した。

その実態が連合軍にバレれば自分も戦犯として処刑されるという恐怖と、せっかく築いた莫大な資産が取り上げられることを心配したのだ。

（むろん実態は連合軍は承知していた）。

だから彼は、資産をスイスや南米の銀行に預けた。

海軍の潜水艦を私的に使ってアルゼンチンに金塊を避難することまでやった。

そして進駐軍がくると、マッカーサーに卑屈に叩頭し、朕はキリスト教徒になってもいい、日本をカソリックの国にしてもよいと申し出た。

宮中の女性を東京裁判のキーナン検事に提供して歓心を買ひ、戦争中の陸軍軍人の内輪情報を（田中隆吉を使って）チクッては責任を全部 東条らに押しつけて、彼らが絞首刑になるように誘導した。みんな自分の命乞いのため、そして資産保全のためである。

中島知久平（中島飛行機 ゼロ戦の製造で有名）は、陸軍が（支那事変で）未だ戦線を黄河あたりまでで止めようとしているとき 閣僚の一人として、漢口まで行かねばならないと主張した。

最も大胆に（中国戦）拡大を唱えたのは、鐘紡社長 津田信吾である。

彼は中国との全面戦争とともに、イギリスとの戦争を説いた。

彼の強硬論は、鐘紡の高利益の基礎に外地会社の多角経営があり、これを積極的に中国領内に拡大する希望を持ったこと、（中略）

中国国内に原材料基地を見出さねばならぬという因果関係からくるものであろう。

中島知久平が閣僚になって戦争を主張したように、また王子製紙社長の藤原銀治郎は、海軍顧問、商工大臣、国務大臣、軍需大臣を歴任し、その地位を利用して戦争で しこたま儲けたクチである。

戦後、自民党の大物議員で 60 年安保時に外相を務めた藤山愛一郎も、戦前 大日本製糖社長として、戦争を煽った人物である。

彼は台湾での製糖事業を一手に握っていたが、さらに南方と中国南部に製糖工場を広げるべき軍部と結託した人間である。

こうした三井、三菱以外の中小財閥も、積極的に戦争経済を推進しようと図ったのである。それを最も喜んだのは、これらの会社の大株主だった天皇であった。

こうして見てきたように、天皇は莫大な蓄財を行うために、財閥と組んで国民を売り飛ばし、戦争を仕掛けて、国民を殺してきた。

責任は、すべて軍人と国民とに押し付けた。

「血も涙もない」とは、このことではなかろうか。

終戦後、彼は「人間宣言」のあと、全国を巡幸して歩いた。

その映像は今も残る。

敗戦で打ちひしがれた国民を、激励すると称して（膨大な予算を使って）行幸したときの姿は、わざと古着にすり減ったクツを履いて、軍部に騙された気の毒な天皇という哀愁を演出してみせたのだった。

彼は 1901 年生まれだから、巡幸のころはまだ 40 代後半なのに、わざと猫背にして 60 歳くらいの老人のように見せているように映像や写真から伺える。

何を説明しても「あ、そう」と答えたことは有名になったが、これも自分は戦争を指揮したりしない、言われるがままの人間だったという印象を与えるためだろう。

戦前には絶対に大衆の前に姿を晒さなかった彼が、大衆に向けてソフト帽子をふりふり、愛想笑いを浮かべて「平和天皇」を演じて見せたことは、戦犯から除外してもらうための進駐軍へのポーズでもあったし、見事に国民をも騙すことにも成功したのであった。

戦後もついにマッカーサーを騙しきって、資産を守った。

天皇が、なんで古着にボロ靴なのか、その心根の深奥を我々国民は知るべきであろう。

天皇の 7 人の最も「忠実な下僕」が絞首刑に、18 人が占領の間中の投獄、そして天皇自身は皇位から退位もせず、「立派な自由主義的紳士」となった。

1948 年 12 月 22 日、絞首台に向かおうとする東条、松井ほか 5 名の男たちは、全員で天皇に「万歳」—— 裕仁朝廷の永世を誓う —— を唱和した。

その処刑に立ち合う責を負った連合軍の外交代表は、一列となって死刑判決を受けた者らの冷徹なユーモアとも映る行動を、深い印象と共に目撃していた。

裕仁のみが生き長らえ、そして記憶にとどめられていた。

戦争後の四年間、彼は戦前からの擦り切れた背広のみを着て、人々とみじめさを共有する姿勢を表した。

そして 1949 年 アメリカの新聞が、彼をぼろ着て散歩していると報じたと家臣が告げたことを契機に、彼は彼の結婚 25 周年を記念して、背広を新調することを受け入れた。

その数年後、作家 小山いと子が皇后良子について小説を書いた時、その新しい背広について書いて話を終わらせていた。

天皇は、イソップやアンデルセンを好み、この作家は彼女の「天皇の新しい服」という喩えが、彼の好感をさそうだろうことを予期していた。

「天皇の新しい服」は、喩え話として、1950年代を飾った。

1940年代の西洋の判事と報道記者の執拗な疑念は忘れ去られた。

私が確信することは、裕仁が少なくとも、そのように見せようとしているような、素直な歴史の被告人なぞでは決してないということである。

彼の侍従の話では、彼は強力な独裁制の主唱者として登場してきたという。

彼は、卓越した知性の持ち主とも言われている。

1945年までは、彼は政府のあらゆる詳細に明るく、すべての分野の官吏と逐一協議しており、常時世界情勢についての全体視野を保持していたという。

彼の民事、軍事、宗教上の力は、絶対的なものと受け止められておりながら、彼はそれをただ儀礼的に、かつ国務大臣の推奨を追認するのみで執行していたとも言われている。

また、どの話の中でも、彼は常に大臣の構想に遅れを取らずに助言を与え、そして彼が受け入れられるような推奨案へと舵取りしていたことが、次々と語られている。

また時には、反対する見解をも採用し、少数意見も受け入れ、あるいはひとつの推奨案を丸々無視したものすら認められていた。

終戦時オーストラリア、ニュージーランド、そして中国の高官はすべて、裕仁天皇は日本の君主であり、日本の戦争責任者のリストの先頭に置かれるべきであることに同意していたことを、キャンベラの書庫で発見して、私には心を和らげるものがあった。

彼らは、その後マッカーサー将軍の決定——天皇を国際法の下での戦争犯罪人とするより日本の復興のために用いる——（私自身、これは賢明な決定と思う）に従った。

私の調べた確証から浮かび上がる天皇の姿は、公式の伝記にあらわれる姿とは、まるで写真のネガとポジのように異なっていた。

私の見方では、裕仁は献身的で、衰えを知らず利巧かつ細心で、そして忍耐力を備えた、卓越した戦争指導者だった。

彼は、アジアから白人を追放するというその使命を、大祖父から引き継いでいた。

だが、国民は無関心かつ後進的であったので、人々をそうした役務にかりだすため、戦争の20年前から、心理的、軍事的に準備を重ね、巧みに操っていた。

公式の人物像は、これとは逆に、裕仁を魅力に乏しいところの多い、文化的に隠居した生物学者で、自らの公務は将官や総督に委ね、そのすべてのエネルギーを穏やかにきのこや小さな海洋生物につきこむ人、と描いてきた。